

竹林の家

紫李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旅人は、その美しい女に恋心を抱いた。

目次

竹林の家

1

竹林の家

道に迷った旅人は、闇の中に明かりを見つけると、竹林の中に入った。

鬱蒼うつそうと生い茂る竹藪は、魔物の住処すみかのような気色が漂っていた。

やっとたどり着くと、そこには柔らかい明かりが漏れる一軒の民家があった。

戸を叩くと、

「どちらさまですか?」

女の声でした。

「夜分にすいません。道に迷ってしまいました。……一晩泊めてもらえないでしょうか」

旅人は言いにくそうに口ごもった。

すると、急いで戸が開けられた。そこに現れたのは、逆光に象かたどられた美しい容貌の女だった。

「それはそれは、お困りですよ。さあ、中へ入っておくれやす」

「……ありがとうございます」

女は、夕飯の残りをご馳走すると、客間に布団を敷いた。旅の疲れもあつてか、男はぐっすりと眠った。

翌日、食事を用意してくれた女は朝日に素顔を向けていた。三十過ぎだろうか、淡い口紅が清楚せいそに映っていた。

女に恋心を抱いた男は、その家に居着くと、薪割りや畑仕事をして、一人住まいの女の子の手助けをした。

「ほんま、助かります。主人を亡くしてからは見よう見まねで野菜を育ててましたさかい」

「僕でできる事ならなんでもします。親切にしてください、ほんのお礼です」

「……けど、こんなに長いこと旅してはつてもええんどすか？」

「大学中退したので、時間だけはたっぷりあります」

「……おおきに」

女は、微笑を湛えた。

裏庭には小さな畑があり、大根やじゃがいもを栽培していた。その片隅には、白い百合の蕾つぼみが風に揺れていた。

それから間もなくして、白い百合が咲き乱れた頃、女は身ごもった事を知った。

その事を告げると、男は慌てふためき、表情を歪めた。そして、男の口から発せられた言葉は、

「……ぼ、僕、家に帰らないと。お母さんが心配してるから」

まるで、子供のようなしやべり方だった。

男の挙動に不審を抱いた女は思った。この男には、一欠片ひとかけらの愛情も無かったのだと。こんな男は親になる資格など無い、と。

翌朝、女が目を覚ますと、男の姿は無かった。女は、深い悲しみに包まれながら朝食を済ますと、庭の隅に置いた斧を綺麗に洗い、薪を割った。

それから、五年の月日が流れた。女の傍らかたわらには、あの旅人の面影を彷彿ほうふつとさせる男の子が居た。

そして、庭先の白い百合も美しく咲き乱れていた。

「おかあちゃん、おはなきれい」

「ほんまに。私たちを見守ってくれてるようやな」
女は微笑みながら、百合に語りかけた。

「あなた、今年も美しく咲かせてもろておおきに」